

旗手 勲

『日本の財閥と三菱』

——財閥企業の日本的風土——

楽游書房 一九七八年 三九二頁

牛 山 敬 二

であった。

とくに三井に対比される三菱については、継続的かつ全面的な研究を困難にするさまざまな制約があつて、なかなか全般的な研究がすすめられぬうらみがあつた。だがようやく最近になつて、いろいろの制約をのりこえて三菱に関する研究も進展をみせはじめた。例えば『三菱鉱業社史』（一九七六年）のような本格的な社史が刊行されている。ここでとりあげる旗手勲氏の新著もその一つである。

二

本書は著者が長年にわたり手がけてきた第二次大戦勃発までの三菱の研究を集大成し、それを主として三井に、副次的に住友に対比しつつ、その特徴を整理し、総じて日本の財閥が形成された体質あるいは風土を論じようとするものである。本書の各章はつぎのようになっている。

序 章 財閥企業の日本的風土

第一章 三菱生成期の資本蓄積と土地所有

第二章 日本資本主義の成立と三菱財閥——三菱展開期の資本蓄積と生産活動——

第三章 三菱展開期の市場活動と資本輸出

第四章 第一次大戦と三菱財閥

第五章 一九二〇年代の三菱財閥

近年日本の財閥研究は飛躍的ともいえる進展をとげている。とくに従来公開されなかった内部資料が漸次公開されるにつれて、推測に頼らざるをえなかった事実関係が、資料にうらづけられて明確にされたほか、多くの新知見がえられるようになってきている。

ただ資料の公開度は関係機関によつて粗密があり、また研究者の側にも関心の向け方のちがひがあるために、研究成果にも当然いちじるしい差異が生じ、たとえば三井や渋沢は資料の公開がもつともすすんでいるために、研究の蓄積もまた深く、詳細であるのに対し、他はなかなかそれに及ばないといった状況

第六章 非常時下の財閥と三菱

右の章別編成からわかるように、著者は戦前期の三菱の活動を、生成期（第一章一九三三年まで）、展開期（第二、第三章一九一三年まで）、三菱財閥成立期（第四章第一次大戦中一九一九年まで）、三菱財閥確立期（第五章一九二〇年代昭和恐慌勃発まで）、非常時再編成期（第六章一九三七年まで）と五つに区分し、それぞれの時期の全体としての資本蓄積と各部門の特徴づけを試み、またそれを三井等の他の財閥と対比しようとしている。

五つの時期を評者なりに簡単に要約すれば、まず生成期は徒手空拳から政府の汽船供与をうけて巨大な海運業者にのしあがり、金融業務や政府への利引き一括返済等の方法で巧妙に資金を蓄積し、さらに日本郵船会社の設立によって海運部門の損失をあげて政府に転嫁しつつ、しかも郵船会社の支配権を掌握した前半と、後半のその転身によってえた膨大な資金を基礎に、炭坑・鉱山・造船・鉄道・土地不動産・有価証券等へ多角的な投資を試みた「三菱社」時代とに区分される。著者はこの後半の時期について、後述するような新資料を駆使して新しい事実を実証しており本書中の白眉の部分である。

展開期の二つの章は、まず三菱合資会社設立以降の鉱山部を筆頭とする各部門別の資本蓄積を総括するとともに、別会計

の岩崎家からの膨大な資金投入が資本の不足を補ったことをあきらかにし（第二章）、また石炭の取引を中心とし、鉱産物・雑貨におよぶ盛んな商業・貿易活動が三菱の生産活動を支えたこと、また朝鮮・台湾・中国への進出が積極的に開始されたことをあきらかにしている（第三章）。

第一次大戦は三菱の事業と利潤を飛躍的に拡大し、それに依拠して一九一七―一九年に各分系会社が独立し、本社は資本金三〇〇〇万円の持株会社として、地所部と査業課のみを直接統括するようになる。著者はこうしてできあがったピラミッド型の企業集団を「三菱財閥の成立」と規定する（第四章）。

このようにしてようやく成立した「三菱財閥」も戦後恐慌の中ではその脆弱性が現れて、大戦中はなやかだった分系会社はいずれも低迷におちいり、それを銀行・地所部・倉庫等の部門が支えて、ようやく財閥として確立していく。しかし岩崎小弥太社長の陣頭指揮にもかかわらず、査業課による海外投資はその大部分が失敗してしまう。国内のカルテル等による独占の強化と、軍縮にもかかわらず軍需への依存が強化されていく（その中でおくればせながら株式の公開や外資導入も試みられるようになる——第五章）。

昭和恐慌以降のいわゆる「財閥の方向転換」の動きの中では三井に比して三菱の動きはきわめて鈍いが、寄付金の増額や精神綱領の内示などをへて、結局一九三七年の三菱合資の「株式

会社三菱社」への組織変更にいたるのである。軍需工業と軍需景気にたよりつつ、商社や銀行の面でも急速に業績を伸ばした三菱は、第二次大戦勃発直前によりやく三井の資本力に接近するのである（第六章）。

以上のように著者は広範な三菱の経済活動を粗密なく全面的に鳥瞰することを意図しているのであるが、その目的のために、膨大な『社誌』その他の三菱関係資料が、細心の配慮のもとに、簡潔な統計表に整理され、また表以外の諸事実も客観的な数字によってひとつひとつ確認しつつ叙述され、三井に対比されており、一読してほぼ七〇年間にわたる三菱の全活動が広く全般的に掌握できるようになっている。長期間の綿密な持続力と体系的整理能力によってのみ可能な、野心的な成果といえることができる。

さらにまた本書の意義は既刊資料の整理・分析にとどまるものではなく、多くの未刊行・未公開の資料を著者がはじめて利用しているところにもある。たとえば、著者のいわゆる「生成熟」の後半にあたる「三菱社」時代の『社誌』はきわめて簡単になっているのであるが、著者は稿本『三菱社誌初代社長時代』、『同二代社長時代』を利用して、この時代の炭坑・鉱山投資や鉄道・公債等への有価証券投資について詳細な経理その他の事実をあきらかにしており、かつて評者が四苦八苦して傍証により推定したことがらともあざやかに証明

してくれているのである。

三

さてこのように三菱の全体像が広く具体的にあきらかにされてみると、われわれの知的好奇心はさらにいっそうかきたえられることになる。

周知のように三菱は、外国の高い生産力を輸入・移植して開始した日本資本主義とともにその歩みをはじめ、最初から金融資本への発展を内包したものであるとして、急速な資本蓄積を遂行したのである。したがって三菱は、一方では産業資本的蓄積方法の確立をめざすとともに、その産業資本的循環を前提しつつも、さらにその外部からさまざまな形で大量の資金を導入しつつ、蓄積を増進した。つまりさまざまな形態での収奪が通常の蓄積過程に組みこまれることによって、かの日本的財閥型金融資本の一典型を形成したのである。

そこで三菱の全体像をより立体的に把握するために、中心となった産業資本的蓄積構造（再生産軌道）をあきらかにするとともに、その周囲にあって、金融資本的蓄積の中に組みこまれた諸部面の収奪構造をひとつひとつ展開の時期に即してあきらかにすることが必要である。この著作によって簡潔に触れられた諸事実をいとうぐちに、多くの実証的研究が発見することが可能とおもわれる。

たとえば囚人労働を含む炭坑労働や鉱山労働における収奪の構造、荷為替や地為替における金融的支配の構造、稲作小作経営の構造、石炭売買における特約取引を通じた支配構造、朝鮮における小作経営、中国における棉花・桐油等の取引や鉱業への資本参加、西原借款における三菱の役割、サガレンの油田・炭田開発や北洋事業の経済的・政治的意味、ボルネオのオイル・パームや木材事業、ブラジルの農業開発、兵器生産における軍および国家財政との深い関係等々、数えきれぬほどの好テーマが予想されるのである。

一見無味乾燥な会計帳簿上の数字も、そのあいまいな勘定項目の中にかくされた事実をひき出すことによって、驚くべき蓄積のからくりをあきらかにすることもできる。そのようにえぐり出される事実を、すでにえられた鳥瞰図の中に比重正しく位置づけていくことによって、三菱研究は飛躍的に精度を高めていくことができるであろうし、またややあいまいな「風土」というような概念の内実を厳密に規定していくことができるであろう。

本書はその契機として、また導き手としても十分な役割をにないうるものと考ええる。

注(1) 拙稿「明治・大正期における三菱の土地投資」(『農業総合研究』第二〇巻第二号、一九六六年四月)。